

所蔵コレクション展 「近現代の絵画と書」

1

日本画

石川淡雲 (1848-1925)

「秋晴寛句図」

(軸装、紙本淡彩 / 123.6 × 23.2)

平成 21 年度寄贈

本名は静正。ほかに淡僊・淡仙などの号をもつ。庄内藩士石川猪太夫の長男として生まれ、致道館で学んで絵や書を能くし、明治 8 年 (1875) には菅実秀に従って西郷隆盛の教えを受けた。のちに同志と一緒に『南洲翁遺訓』を携えて全国各地を巡遊し、広く頒布した。

特に画人として著名で、水墨画のほかにも油絵を描いており、庄内でも早い時期に洋画の画法を取り入れている。明治 9 年 (1876) に解体された鶴ヶ岡城を油彩で描いたほか、郷土画家として多くの作品を制作した。

2

書跡

黒崎研堂 (1852-1928)

李白詩 七言絶句「楊花落…」

(軸装、紙本墨書 / 173.3 × 70.3)

平成 20 年度寄贈

庄内藩家老酒井了明の三男として鶴岡に生まれる。本名は与八郎。明治元年 (1868) に黒崎友信 (与助) の養嗣子となる。実兄に戊辰戦争で鬼玄蕃と称された了恒、庄内柿の普及で著名な調良がいる。

旧庄内藩主酒井忠篤とともに鹿児島に赴いて兵学を学び、明治 5 年 (1872)、松ヶ岡開墾に従事した。その後、金融機関の済急社の社長を務め、明治 34 年 (1901) に町会議員となる。

幼少の頃より書に長じ、日下部鳴鶴に入門、以来研鑽を重ねて庄内における書道興隆の基礎を作って多くの門弟を育てた。

(釈文)

楊花落尽子規啼、聞道龍
標過五溪、我寄愁心与明
月、隨風直到夜郎西

(読み下し)

楊花落ち尽くして子規啼く、
聞道く龍標五溪を過ぐと、
我れ愁心を寄せて明月に与う、
風に随って直ちに到れ夜郎の西

3

日本画

池田亀太郎 (1862-1925)

「黒崎研堂像」

(軸装、絹本着色 / 75.0 × 35.4)

平成 20 年度寄贈

池田亀蔵の長男として酒田に生まれる。明治 17 年 (1884)、洋画家・高橋由一が酒田に来た折、その薫陶を受け、のちに上京する。写真術を学んで写真屋を開いた。

酒田における油絵の先駆者と知られ、鯉図のほか、地元名士の肖像画を多く描き、風景画や静物画も残した。写真の技法を取り入れた迫真的な洋画表現は、当時の新興文化として大きな注目を集めた。末弟の池田亀三郎は、酒田の実業家であり、日本の石油化学工業を振興させた第一人者として著名である。

4

書蹟

副島種臣 (1828-1905)

七言絶句「伊予多豪士」

(軸装、紙本墨書 / 175.0 × 95.2)

平成 20 年度寄贈

幕末に佐賀藩士として生まれ、明治新政府の中樞で活躍した。和・漢・洋にわたって広い学識をもち、書家としても高い評価を得ている。

庄内の旧庄内藩士・菅実秀らは副島と親交を結び、副島が鉱山への投資失敗、詐欺被害などにあつて多額の借金を抱えた際には、酒井家から多額の融資を行なった。この厚誼に応える形で、副島は庄内を訪ね、詩経を講じたり、多くの書を揮毫している。

(釈文)

伊予多豪士、不知孰是
一、縦有能弁舌、詎若
告心実 未□最日齋某
来告别、漫然量余、書此贈云、種臣
(印) (印)

(読み下し)

伊予豪士多し、知らず孰か是れ一、
縦い能く弁舌有る、詎ぞ心実を告ぐる若かん

書蹟**巖谷一六 (1834-1905)**

七言絶句「邵平瓜地…」

(軸装、紙本墨書 / 148.4 × 78.2)

平成 24 年度寄贈

水口藩(近江国)の藩医の子として生まれる。父・玄通とは幼児に死別して母と出京、書・漢学・医学を学んだ。21歳で帰藩して父の職を嗣ぐ。明治維新後は徴士・議政官・史官・太政官内史となり、当時の詔勅・制令の浄書を執筆した。その後、内閣書記官・元老院議官等を歴任した。一六流と称される書風を確立し、日下部鳴鶴と並んで明治を代表する書家としてうたわれた。

(釈文)

邵平瓜地接吾廬、
穀雨乾時手自鋤、
昨日春風欺不在、
就床吹落読残書

金野大人蜀

一六居士脩書(印)(印)

(読み下し)

邵平の瓜地吾が廬に接し、
穀雨乾く時手自ら鋤、
昨日春風不在なるを欺り、
就ち床に吹落す読残の書

書蹟**宮島詠士 (1867-1943)**

土井晩翠詩題「星落秋風五丈原」

(軸装、紙本墨書 / 129.0 × 34.5)

平成 23 年度寄贈

山形県米沢出身。本名は吉美。若くから清国語(中国語)を学び、清国に留学して教義・書法を研究した。帰国後は中国語教育と日華親善に尽くした。師友会を主催した安岡正篤は、宮島のことを「東洋の君子」と称している。書は師の張廉卿直伝の書法で「自然自在の書」といわれ、たっぷり墨を含ませた筆により滲んだ部分は、一種独特の風情を醸し出している。

土井晩翠が明治 31 年(1898)に発表した叙事詩である「星落秋風五丈原」は、志半ばで五丈原に病没した諸葛孔明の心を表現した詩であり、晩翠の最高傑作といわれる。

(釈文)

星落秋風五丈原
(印)

日本画**池田月潭 (1881-1923)**

「面作師夜叉王」

(軸装、絹本着色 / 213.5 × 83.5)

平成 24 年度寄贈

旧庄内藩士池田道重の長男として東京神田今川小路に生まれる。本名は龍治。幼い頃から花鳥風月の画法や南宋画を学んだ。歴史画の大家として知られる村田丹陵に師事し、18歳で画人として独立した。研鑽を重ねた月潭は、洛陽美術社刊『日本絵画評価番附』(大正 11 年 1 月調査)において著名作家 21 人として、富岡鉄斎や竹内栖鳳らとともに紹介されている。中央画壇よりも地方に活動の場を置き、総数 3,000 点余もの作品を残す。大正 12 年(1923)、関東大震災で被災し、同年逝去した。享年 42、鶴岡の本鏡寺に葬られている。

本図の夜叉王とは、岡本綺堂の戯曲「修善寺物語」の主人公で、伊豆の修善寺に住む面作師。

書蹟**松平穆堂 (1884-1962)**

二行書「積善之家必有余慶」

(軸装、紙本墨書 / 昭和 30 年制作 / 130.0 × 50.0)

平成 20 年度寄贈

本名は末吉。塚原権平の子として羽黒町松ヶ岡に生まれ、松平久彰の養子に入る。山形県師範学校を卒業後、酒田高等女学校の教諭となり、大正 5 年(1916)には、中国に渡って山東省青島の日本人高等女学校に勤める。帰国後、教員を勤めるかたわら、鶴城書道会を設立する。昭和 14 年(1934)には宮内省より招かれて図書寮嘱託となって皇統譜など多くの官紀を書く。帰郷後、書道館を建てて後進の指導に専念した。

黒崎研堂門下随一の逸材で、漢詩文を能くしたほか多くの古法帖に通じ、特に楷書と隸書を得意とした。

(釈文)

積善之家必有余慶

(読み下し)

積善の家、必ず余慶有り

書蹟**土屋竹雨 (1887-1958)**

菅公 七言律詩「端然…」

(軸装、紙本墨書 / 138.5 × 54.2)

平成 26 年度寄贈

本名は久泰。鶴岡に生まれ、庄内中学校、(旧制)仙台二高を経て東京帝国大学を卒業する。昭和 3 年(1928)、藝文社を創設し雑誌「東華」を主宰して漢詩文活動を進める。当代随一の漢詩人と称された。昭和 20 年(1945)に鶴岡へ疎開してからは、郷里において漢詩の普及に努めた。

核兵器による惨禍をまざまざと長詩に詠じた「原爆行」「水爆行」は、国際的にも高い評価を得た。戦後は大東文化大学長を歴任し、日本芸術院会員にも推挙された。

少年時代、黒崎研堂に書を学んだ竹雨であったが、その後、巖谷一六の書風に傾倒し、長じるにつれて独自の書風を確立した。

(釈文)

端然袍笏侍天闈、啓沃翰誠相業
尊、閭族勢威生党禍、謫臣詞賦感君恩、
拜衣幾濺秋風淚、變闕空馳夜月魂、長
仰日東儒学祖、文勲千古炳乾坤
菅公 竹雨久泰謹賦 (印) (印)

10

日本画

星川清雄 (1894-1923)

「童女三人」

(軸装、絹本着色 / 159.0 × 144.5)

平成 20 年度寄贈

鶴岡・鳥居町に医師で歌人の星川清民の長男として生れる。幼少より絵を得意とし、荘内中学校で小貫博堂に師事、東京美術学校日本画科に入学して結城素明に師事、首席で卒業、卒業制作「春」は同校買上げとなる。卒業後、実業之日本社に入社し雑誌の口絵を描く。大正 11 年(1922)に「童女三人」が帝展に初入選、平和記念東京博覧会に「春禽」を出品し、伊東深水の出世作と競って入賞、師の結城素明より「輝洋」の画号を贈られ将来を嘱望された。

大正 12 年(1923)5 月に母を、7 月に妻を失い、本人も 9 月 1 日入院先の病院で関東大震災に遭い、倒壊火災で夭折した。享年 30、鶴岡市の常念寺に葬られる。短い生涯で数多くの作品を描いたが、その作品の多くは青森の親類に預けられたが、戦時中の空襲によって焼失した。

11

日本画

金子八畝 (1903-1983)

「林間遊雉図屏風」

(屏風、六曲一隻)

平成 23 年度寄贈

本名は八吉。福島県小浜町(現福島県二本松市)に生まれる。父は画家の金子平太。大正 7 年(1918)に上京し、日本画家 荒木十畝の内弟子となる。その後、日本各地をまわり画業の修行を続け、昭和 6 年(1931)湯野浜に寄寓。大山に移り、その後は鶴岡に居を構えて画業に専念した。元曲師町(現本町)に私設の鶴岡美術館を創設し、絵画、書、雛人形などを展示した。後に同館を書道館に転用し、引き続き郷土文化向上に貢献する。

昭和 31 年(1956)、山形県美術協会の再編により発足した山形県美術連盟の運営委員となる。花鳥画を得意とし、新興美術院、春光会、白鸞社など多くの展覧会で精力的に発表を重ねた。

12

油彩画

石井弥一郎 (1898-1972)

「真鶴」

(額装、キャンバス、油彩 / 73.0 × 90.8)

平成 23 年度寄贈

飽海郡吹浦村(現遊佐町吹浦)に生まれる。川端画学校で藤島武二に師事、その後、前田寛治研究所で学び、太平洋画研究所では中川一政、吉田博に師事した。また、満谷国四郎にも師事。1920 年代から、協会展、第一美術協会展、槐樹会展、春陽会展、新興美術協会展、新文展、サロン・ド・トーヌなどへ幅広く出品を重ねた。

戦後は、太平洋画会会員として同会展に出品を重ねるほか、東京を中心に個展を多数開く。昭和 43 年(1968)、太平洋画会展で「真鶴(入江)」(山形美術館所蔵)が藤井記念賞を受賞。遊佐町の海禅寺に葬られた。

13

日本画

中村雅彦 (1897-1964)

「石仏」

(額装、絹本着色 / 52.0 × 60.0)

平成 24 年度寄贈

本名は正吉、別号に美芳。鶴岡町十三軒町(現鶴岡市三和町)に生まれる。明治 44 年(1911)荘内中学校を 3 年で中退して上京、薦谷龍岬のもとで日本画を学んだ。昭和 2 年(1927)年、帝展で「寧楽春興」入選。戦時中は筆をおき、横須賀市田浦の海軍水雷学校で軍属として働く。戦後は再び絵画の制作を始め、横須賀基地で壁画などを描く。鶴岡市の安国寺に葬られた。

14

書蹟

佐藤寒山 (1907-1978)

細井平洲詩五絶「尽日・・・」

(額装、紙本墨書 / 55.0 × 79.5)

平成 25 年度寄贈

鶴岡に生まれる。本名は貫一。刀剣研究家。鶴岡中学校を卒業し、國學院大學国文科を経て中学校教員となる。教員を勤めるかたわら、昭和 17 年(1942)より文部省国宝調査室嘱託を兼務した。その後、東京国立博物館に勤務し、昭和 44 年(1969)には刀剣博物館副館長を兼ねて美術刀剣保存協会事務局長を務めた。

酒田出身の本間薫山とともに、戦後の美術刀剣保存運動に大きく貢献し、刀剣研究を学術的に体系化するなど、現代日本刀剣界の第一人者として評価される。

本書は、江戸時代の儒学者で上杉治憲(鷹山)の師としても知られる細井平洲の詩を書したもの。

(釈文)

尽日山堂裏
相忘主与客

遥看橋上賓
也是意中人
細井平洲先生詩
寒山誌
(読み下し)
尽日山堂の裏
相忘る主と客と
遙かに見る橋上の賓
また是れ意中の人

15

書蹟

江川蒼竹 (1917-2008)

三大字「喫茶去」

(額装、色紙、墨書 / 34.0 × 44.8)

平成 26 年度寄贈

新潟県新潟市に生まれる。本名は清。20歳で上京し、書壇院の創設者・吉田苞竹に師事する。後に新潟へ帰郷し、新潟県内の書道普及に尽力した。書壇院理事長・名誉顧問、新潟県美術家連盟理事長などを務め、新潟県芸術文化功労賞、叙勲・勲五等瑞宝章を受賞するなど、書道文化の発展に寄与した。

「喫茶去」とは禅語のひとつで、中国唐代の趙州禪師語録のなかに、その語源となる話がある。「お茶でもいかがですか？」という意味であり、知れた客人にも初めての客人にも、どんな人に対してもこの「喫茶去」という気持ちが大切だということ。

16

油彩画

杉村惇 (1907-2001)

「最上川五月」

(額装、キャンバス、油彩 / 38.0 × 44.5)

平成 26 年度寄贈

東京市牛込区(現新宿区)に5男4女の末子として生まれた。両親とも鶴岡市の出身。

戦後の昭和21～39年頃に塩竈、以後は仙台で暮らし、塩竈の風景や鮮魚を題材に、数多くの油彩画を描く。静物画を得意とし、「静物学者」の名で親しまれた。

昭和2年(1927)、東京美術学校(現東京藝術大学)西洋画科に入学、岡田三郎助に学ぶ。

自身の制作活動を続けながら、塩竈・仙台で様々な美術団体の運営に参加、結成に尽力するなど芸術文化の振興に大きく貢献した。物の〈存在と空間〉を追求し続け、93歳で亡くなるその年まで精力的に作品と向き合い、一貫したテーマを追求し続けた。仙台市名誉市民、紺綬褒章受章。

17

油彩画

武田儀助 (1908-1990)

「白雲」

(額装、キャンバス、油彩 / 昭和36年作 / 80.3 × 116.7)

平成 22 年度寄贈

西田川郡田川村(現鶴岡市田川)に生まれる。号は州弘、光正。

大正13年(1924)鶴岡中学校在学中に野坂是勇、齋藤求らと美術団体白虹社(現白雲社)の創立に携わった。東京美術学校西洋画科へ入学。卒業後は東京美術学校同期生のグループ童林社の展覧会に出品を重ねる。

戦後は出版関係の会社に勤務し、昭和25年(1950)頃より、東京都内の区立中学校で美術教師をつとめ、退職後は田無市(現西東京市)の自宅に絵画の制作に専念する。静岡県富士霊園に葬られる。

18

油彩画

今井繁三郎 (1910-2002)

「木立」

(額装、キャンバス、油彩 / 65.5 × 80.0)

平成 20 年度寄贈

東田川郡泉村(現鶴岡市羽黒町)に生まれる。鶴岡中学校を卒業後、上京し芝絵画研究所に学ぶ。昭和11年(1936)より雑誌『美之国』の編集に携わり、小川芋銭や山本丘人など、多くの画家と交流を持つ。自由美術家協会の第1回展から出品を続け、戦後には山口薫、難波田龍起らと同会を再組織する。昭和16年(1941)、従軍画家として華南に赴き、異国情緒ある人物や暮らしを、軽快な色彩と筆致で描き出す。昭和20年(1945)空襲で自宅が焼失し、当時の作品のほとんどを失う。終戦後、郷里の羽黒へ戻り、白雲社の委員長を務めるなど、後進の育成にも力を注いだ。平成2年(1990)、自宅庭に元禄2年(1689)建立の蔵を移築し、今井繁三郎美術収蔵館を建設した。鶴岡市特別文化功績賞受賞、羽黒町名誉町民となる。91歳で逝去。

19

日本画

伊藤喜久井 (1911-2002)

「いろり火」

(額装、紙本着色 / 133.0 × 97.0)

平成 23 年度寄贈

鶴岡町七日町(現鶴岡市本町)に生まれる。鶴岡高等女学校で、小貫博堂の指導を受ける。女子美術学校日本画師範科を卒業した後、小貫の紹介で荻生天泉に師事、日本画会展、女子美術院展、日本画院展などに入選した。

昭和20(1945)年、鶴岡に帰郷。在郷の日本画家らとともに丹青社を設立。白雲社における日本画部門の充実を図り、後継者の育成と日本画の普及発展に尽力した。平成9年(1997)、鶴岡市市政功労者表彰、翌年に齋藤茂吉文化

賞を受賞。

平成14年(2002)、白襷社委員長に就任まもなく逝去した。
春光会会員。新興美術院参与。

20

挿絵下絵

山本甚作 (1915-1996)

藤沢周平「蟬しぐれ」(新聞連載) 挿絵下絵
(紙に鉛筆、墨) ※参考出品: 同画挿絵

平成21年度寄贈

大正4年(1915)、西田川郡西郷村大字馬町(現鶴岡市馬町)に生まれる。鶴岡中学校を卒業し、昭和9年(1934)、東京美術学校建築科へ入学。田辺至、朝倉文夫に学ぶ。

昭和19年(1944)疎開のために帰郷し、戦後は母校で教鞭を執りながら白襷社事務長として郷里の美術振興に尽力した。

昭和28年(1953)に東京へ転居、朔日会を退会した翌年、太平洋美術会会員となる。後に示現会に転じ、日展などにも出品を重ねる。昭和52年(1977)絶展を結成。昭和61年(1986)から翌年まで、藤沢周平の連載小説「蟬しぐれ」の挿絵を描く。平成4年(1992)、紺綬褒章受章。つくば市の筑波葦崎霊園に葬られる。

21

日本画

成澤翠映 (1915-1998)

「雀図」

(額装、色紙、着色/27.2×24.1)

「田園」

(額装、着色/18.2×14.2)

平成26年度寄贈

山形県東田川郡渡前村(後の藤島町、現鶴岡市)に生まれる。本名は喜三郎。

鶴岡中学校在学中は、地主悌助に学ぶ。同期生には、大久保公治・三井惣一・山本甚作がいる。東京美術学校を昭和14年(1939)卒業し、海軍事務官に任官。昭和28年(1953)より、日月社会員の新井勝利に師事。昭和33年(1958)日本美術院院友となる。享年82

22

版画

三井永一 (1920-2013)

「十字の華」

(リトグラフ/摺師 北園武/32.0×52.0)

「不精者のバツタ (私の昆虫記 3-3)」

(キャンバス、油彩/65.2×53.0)

「高台」

(キャンバス、油彩/80.3×100.0)

平成25年度寄贈

鶴岡市生まれ。鶴岡中学校を卒業後、川端画学校、春陽会洋画研究所に学び、木村莊八、中川一政、岡鹿之助らに師

事した。

昭和39年(1964)に文展(現日展)に初入選、春陽会を拠点に活動し、春陽会版画部の設立にも携わる。油彩画、版画、ガラス絵など、数多くの作品を制作した。国際アートクラブ会員、日本ガラス絵協会会員。

挿絵画家としては柴田錬三郎、横溝正史、永井荷風、江戸川乱歩、池波正太郎らの作品を手がけ、昭和46年(1971)講談社出版文化賞(挿絵部門)を受賞した。

23

水彩画

星川清彦 (1922-2010)

「静海西煌 (我が生涯)」

(額装、紙、水彩/112.0×162.0)

平成20年度寄贈

日本画家・星川清雄・栄子の長男として東京市下谷区谷中清水町(現東京都台東区池之端4丁目)に生れる。1歳で次々に両親を失い、母の実家である青森で育った。幼少の頃より絵を得意とし、画家を目指そうとした時期もあったが、状況が許さず断念、昭和17年(1942)、京都高等工芸学校(現京都工芸繊維大学) 図案科(のちに建築工芸科と改称)に入学。翌年、学徒出陣、海軍航空隊操縦員として訓練に従事、終戦後に同校建築工芸科を卒業、高島屋インテリア設計部門に勤務した。退職後には念願の水彩画に打ち込み、昭和62年(1987)光陽会展で初入選、以後光陽会を中心に発表を続け、数多くの受賞を果たした。

24

油彩画

鈴木伴造 (1924-2003)

「MANDARA」

(額装、キャンバス、油彩/130.3×162.1)

平成23年度寄贈

鶴岡町鷹匠町(現若葉町)に生まれる。昭和13年(1938)、鶴岡中学校在学中は白襷社展に出品。戦後は、釜石市で鉱山関連の会社に勤務。この頃より創造展に出品を重ねる。昭和30年(1955)、創造美術会会員に推挙。

1964(昭和39)本社勤務のため東京に転居。退職後は画業に専念し、創造展のほか、安井賞展、絶展など幅広く出品を重ねる。また、創造美術会運営委員、事務局洋画部長として、審査受賞委員、事務局長をつとめた。昭和56年(1981)第34回創造展で「雨の日も」で創造美術会賞を受賞。東京を中心に個展を多数開催。鶴岡市の禅龍寺に葬られる。

25

油彩画

尾形圭介 (1936-2011)

「小樽初夏」

(額装、キャンバス、油彩/38.0×45.7)

平成20年度寄贈

山形県鶴岡市に生まれる。小樽商科大で会計学を専攻したが、学生時代より絵画に関心を持ち、昭和40年(1965)二紀展で二紀賞を受賞して同人になり、昭和52年(1977)会員に推挙される。安井賞展・シェル美術賞展などでの受賞、ハマ展・サロンドートンヌ展での入賞多数。紀伊国屋画廊ほか、個展を多数開催した。

大胆な色使いや、力感に溢れた画風により、独自の世界観を築いた。

26

銅版画

小松章三 (1938-2011)

「感覚体の図」

(額装、紙本/昭和40年制作/42.0×19.0)

平成27年度寄贈

東京・瀧野川生まれ。幼少時に旧温海町に移住し、鶴岡南高等学校時代に斎藤求氏に師事、白襖社展で入賞するなど頭角をあらわす。武蔵野美術学校卒業間近に深澤幸雄氏の手ほどきを受けて銅版画に開眼する。希有な才能と独特の審美眼を持ち、モダンアート展新人賞、シェル美術賞、ノースウエスト国際版画展シアトル美術館買上賞などに輝く。洗練されたエロティシズムを作品に昇華させ、独自の世界観を築き、創作の場を鶴岡に移して活動を続ける。本の装幀やデッサン会の主宰にも携わった。

銅版画という表現方法から生まれる“黒”に魅せられ、生涯にわたって銅版画家として精力的に制作活動を行う。東京を中心に開催した個展は50回を越える。

27

油彩画

武田敏雄 (1938-)

「春の鳥海山」

(額装、油彩/31.6×41.1)

平成27年度寄贈

山形県東根市生まれ。奥羽美術研究所にてデッサンを学び、昭和43年(1968)、示現会展に初入選、以後毎年出品を続け、昭和54年(1979)示現会会員推挙。日展にも出品を重ね、平成元年(1989)日展会友となる。

意欲的に作品制作に取り組み、安田火災財団奨励賞、上野の森美術館大賞展佳作賞、日展特選、斎藤茂吉文化賞など受賞多数。

現在、日展会友無鑑査、示現会会員山形支部長。県展無鑑査、日展山形会副会長。



致道博物館

〒997-0036 山形県鶴岡市家中新町10-18 TEL:0235-22-1199

開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
※12月より水曜休館・午後4時30分閉館(入館は午後4時まで)
入館料 一般700円/高大生380円/小中生280円(20名以上で団体割引有)
※常設展・庭園の観覧料を含みませ
主催 公益財団法人 致道博物館
共催 山形県・公益財団法人山形県生涯学習文化財団・鶴岡市教育委員会